

新型コロナウイルスの初期対応について：厚生労働省・内閣府への Meil 投稿文

小生、栃木県の一開業医です。

大学病院時代から超音波専門医として患者さんに接して参りましたが、平成3年の開業以降、徐々に膵臓の存在に着目し、大学病院時代では知り得なかった膵臓の隠された働き（非常に魅力的でもあります）を知り、小児からお年寄りまで様々なケースの対応に活用しております。

膵臓の表向きの働きは消化を助け・血糖をコントロールすることですが、もっと重要で有難い働きが隠されています。それは、元々体力のない方や体力の低下している方たちに注意信号を与え、早い段階から“異状”に気付かせ、直ちにバランス良い状態に戻し（初期対応が適正であった場合の話です）、元の健康体に早期に復帰させる働きです。この働きは正に母親のようでもあり非常に有難いものですが、そのことに気付いている医者は残念ながら皆無です。

生まれつき体力のない方や体力が低下する状況にある方たちは膵臓の働きも低下しており、低下している体力や消化能力を上回る生活や食事が膵臓の負担となって様々な注意信号を発することになります。しかし、これらの多くはごくありふれた症状で終始するため、膵臓を意識するものとはならず、お腹（膵臓）の安静に結びつきません。

今回の新型コロナウイルス感染症の初期の段階での対応には大きな落とし穴があります。それは、発熱・咳が見られる初期段階でのお腹の対応です。

発熱があり、それが何日間も続く状況は明らかに膵臓への負担が続いている証拠です。そして、膵臓への負担が気道の浮腫（鼻汁や肺水腫など）を生じ、その後の強い呼吸困難の原因になりますし、全身の浮腫から頭痛やめまい（脳や内耳のむくみに起因）の自覚にもつながるかもしれません。さらに、全身がむくむ反面、血管内脱水からの強い口喝を感じて水分などを一気に飲んでしまう場面が容易に想定されますが、この初期段階での対応の間違いが弱くなっている膵臓を更に刺激し、その後の病状悪化をもたらす大きな原因となります。そして、膵臓の負担の遷延化は更なる免疫力の低下を招いてウイルス性肺炎などを併発し、場合によってはサイトカインの嵐から全身炎症状態（SIRS）に進展することも十分考えられます。

呼吸不全の悪化はもちろんのこと、発熱・下痢・嘔吐などからの脱水に加え、膵臓の負担から血管内の水分が大量に血管外に漏れ（この時は全身浮腫状態に陥っています）、心臓（不整脈の誘発・心筋障害）・腎臓（腎不全）・脳（脳梗塞及び脳浮腫）などへの影響が致命傷になって行く可能性も考えられます。

小生の印象では新型コロナウイルス感染症はB型インフルエンザに似た部分があります。即ち、体力がありお腹（膵臓）が丈夫な方たちはウイルスに感染していても自覚症状に乏しいため感染予防策をとらず普段通りの生活を続けてしまい、流行拡大を招く大きな原因になります（B型インフルエンザの感染拡大の終息は子供たちが学校などに行かなくなる春

休みです)。一方、体力がなくお腹（膵臓）が弱い方たちは明らかな発熱が出現しやすく、医者に慌てて駆け込むこととなります。以前、A型/B型インフルエンザ症例の尿中膵アミラーゼ（クレアチニンとの対比）値を比較したことがありますが、明らかにA型よりB型で高い値を示す傾向（膵臓が強い傾向）を示し、負荷が強く長く持続するために解熱後暫くは十分なお腹（膵臓）の安静と監視が必要になります（B型インフルエンザ回復期に1か月以上気管支炎症状が持続した60歳代の男性例では、病状回復後に糖尿病顕性化が認められました）。

新型コロナウイルス感染者の高危険群に糖尿病症例（膵臓の働きが弱くなっている人たち）が多いのも当然ですし、喘息やCOPDも慢性の膵臓負荷の結果とも考えられます。また、若さや成長ホルモン・女性ホルモンは膵臓の働きを助ける可能性があります。仕事を終えて疲労が残る週末に長距離の旅行を敢行し、さらにライブハウスで若さを存分に発散させて帰宅する状況下では膵臓の働きが低下するのは当然と言えますし、スポーツジムでの感染患者が多い現象も同様の機序が考えられます。また、長期旅行から帰って来た際、疲労の蓄積と緊張感からの解放が膵臓の負担となって発熱や消化不良症状を呈することはよく見られる現象です（クルーズ船のケースもこれに当たるかもしれません）。

新型コロナウイルス感染者の症例報告では膵臓の関わりを疑う手掛かりは殆ど見られませんが、熱や咳のほかに頭痛（脳のむくみ）や咽頭痛（食べるなというサイン）なども一応膵臓負荷が疑えますし、肝機能障害は胆道系を介しての膵臓負荷の反映とも考えられます（膵臓負荷は原因不明の肝障害の多くを占めているかもしれません）。そして、初期段階で肺水腫を疑う酸素濃度の低下が存在すれば、膵臓負荷の解消を積極的に図るべきでしょう（ご参考までに、昨年12月に2回目のインフルエンザ脳症を発症し、当院での治療にて入院せずに回復した女児例の抄録を添付いたします（添付資料I）。小児科学会地方会での発表を予定しておりましたが、コロナの影響で会は延期となりました。この症例では来院時に軽度の意識障害と酸素濃度の低下が見られ、膵臓負荷からの症状と判断して速やかに治療を開始し、同日の夜には回復の兆しが見え、5日後には元気な身体に戻っております）。

以前の小生もそうでしたが、大学病院の知識では膵臓負荷を意識することは困難です（一連の症例報告で膵臓関連の指標が掲載されていないのは当然と言えるでしょう）。強い膵炎症状がない限り、血液で膵臓の変化を捉えることは無理がありますし、CT検査上にも膵臓の変化は現れません（CT上、胆嚢腫大像や胃泡の拡張像は間接的に膵臓負荷を疑う所見ではあります）。小生は超音波検査から膵臓の微妙な変化を確認しており（これらの評価も超音波検査診断基準には全く当てはまりません）、前述のインフルエンザ脳症のケースでも超音波検査上の膵臓の菲薄化から消化能力の弱さを推定し、後にその弱さの裏付けとサイトカイン上昇などの生化学検査結果を得ております。

初期段階から膵臓負荷の存在を疑い、速やかにお腹（膵臓）の安静を図ることが出来れば、病状の悪化を最小限に食い止めることは可能でしょうし、もっと前の段階からお腹（膵臓）を意識した予防策を講じておけば、ウイルスの拡散も抑制可能となるでしょう。もし万が一、

何処かでウィルスを貰ったとしても、これをはねのけられる体力維持がなされていれば（皆の理解・協力が大切です）、新型コロナウイルスは怖い存在ではなくなって行く筈です（但し、油断は禁物ですが）。さらに、発熱の持続や呼吸困難が見られるケースに対しては腓炎症状がなくても腓負荷改善対策として積極的に腓炎治療薬（FOY など）を使うべきでしょうし、回復期にも油断せず十分なお腹（腓臓）の安静に努めるべきと考えます。

小生のクリニックでも、基本を押さえ・いたづらな不安を防止するための方策をまとめたパンフレットを配っております（添付資料Ⅱ）。

長い文章になりましたが、現時点で外部から知りうる範囲での意見を述べさせて頂きました。関係部署には個々の症例の細かな情報が存在すると思いますので、それらの内容からさらに踏み込んだ助言をお伝えすることが可能かもしれません。

新型コロナウイルス感染症撲滅のために日々努力を続けておられる皆様に敬意を表しますとともに、今までの経験から得られた小生の今回のアドバイスが少しでもお役に立てればと考える次第です。

2020年3月8日 川島内科小児科クリニック 川島 隆

添付資料Ⅰ：

「インフルエンザ脳症を繰り返したケースの初期対応」
(2020年3月・日本小児科学会栃木県地方会応募抄録)

細身体型の11歳女兒。9歳時にB型インフルエンザ（ワクチン実施）で軽い脳症併発。今回、A型と診断されタミフル1回服用後に飲水困難持続・意識混濁（JCS：II-10）出現。**SPO2：92%（臥位）**・顔面浮腫状・舌乾燥気味・軽度の腹満を見た。腓負荷を疑いFOY加輸液を実施。イナビル吸入と少量ずつの水分摂取を支持し夕方には意識混濁軽減。消化能力が弱いと判断されるケース（本例の腹部US：腓体部4mm厚・血中リパーゼ：2U/L）ではお腹（腓臓）を意識した初期対応が重要である。

添付資料Ⅱ：

『新型コロナウイルス対策』について

(2020年2月17日・患者向けパンフレット)

- 「診断キット」の入手は困難です。“自己防衛”が基本です。
- 発熱時、必ず「酸素濃度」をチェックすべきです。低下例は注意深い経過観察が当然必要ですし、正常例でも油断は禁物です。但し、下記の対策を講じておけば“重症化”は防げる筈

です。

自己防衛対策

○手洗い／うがい／マスク装着などの予防処置を講じる・不要不急の外出は極力避ける・疲労やストレスを最小に留め、“体力維持”に努める。

○発熱時の保温・十分な安静（睡眠）の外に**お腹の安静（「脾胃」を意識した）も重要**です。

○中国からの呼吸不全入院患者報告（JAMA.2020.1585）によると、初期段階から10%程度の患者に消化器症状がみられています。更に、頭痛やめまい（脳や内耳のむくみ？）・不整脈／心筋障害や腎障害（消化不良による脱水？）・肝障害（脾胃負荷による胆汁うっ滞？）なども見られ、お腹（脾胃）への負担が疑われる病像です。**「脾胃負荷を意識した十分なお腹の安静」にも努めるべき**です。

○「脾胃負荷を意識した十分なお腹の安静」とは

保温・身体の安静を担保した上で、お腹を刺激しない形での食餌の確保（高熱時には固形物の一時的な排除・水分補給も小分け少量ずつ（白湯・味噌汁・甘酒・温めたゼリー状のイオン飲料など）・解熱後は半日経ってからの段階的な食事再開・場合によっては一時的な絶食＋輸液も必要

ポイント

体力・免疫力が確保されていれば、持病や年齢などに関係なく「新型コロナウイルス」も怖い病気にはなりません。“冷静な対応”をお願いいたします。

以上